

国へ輸送する物資の貨車積み作業が続いた。最後には構内に付設してある鉄道のレールまで引きはがして運び去る徹底ぶりであった。奉天で越冬して、翌二十一年五月、コロ島から日本へ引き揚げた。

波乱万丈の満州生活は、たった二年間であった。引き揚げてからも大家族の生活も容易ではなかった。昭吾氏も農業の傍ら馬で木材搬出の仕事に就いた。

その後、昭和二十三年九月、益田高等学校校定時制に入學し、四年半の勉学の後、卒業し、地方公務員試験に合格。岐阜県職員に採用となり、県立病院の事務職員として、爾来、定年まで三十六年間勤めた。堅忍不拔の士である。しかも訪中団に参加して日中友好の実をあげている奇特の人物である。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

敗戦の辛苦

岐阜県 山内 馨 夫

大正四年、岐阜県可児郡御嵩町に生まれた直後、父が御嵩町の小泉神社こいずみより岐阜伊奈波神社に転任になり、駒爪町に移る。さらに、父は伊勢神宮に転じたため、就学直前まで任んでいた岐阜より伊勢市へ移り入學した。大正十二年のことだ。またまた父は神宮司庁の京都支庁に換わり、京都九条小学校に転校、居を深草に変えたため深草小学校へと変わった。わずかな期間に三度も各県にわたって変わったため、方言によるいじめをうけた覚えがある。当時の神社界では、県社以上の神社の神職は、内務省神社局管轄下の各県の所管課の社寺兵事課より、辞令一枚で異動が行われ、全国的に動いたのである。

大正十三年に、先に渡満していた祖父(山内祀夫)が奉天神社宮司として、呼び寄せの形で辞令をもらい

奉天に渡った。小学校二年の秋ごろだった。満州の十月十一日ごろは内地の寒さより数段寒く、震えあがった覚えがある。

当時の日本人の人口は、二万人足らずで、市街地もまばらで寂しく感じた。しかし驚いたことは、既に都市ガスが家庭に引かれ、上水道あり、暖房もペーチカで石炭を燃料とし、冬というのに暖かく家にいると汗をかぐぐらいだった。満鉄がいかに社会施設に力を注いできたかが窺われる。京都でさえ市街地は別として郊外地はガス、上水道もなきに比べてびつくりした。れんが造りで二重窓に鉄棒が入り、オリの中に住んでいるような錯覚を感じた。厳寒の窓は氷が張りつき、まるで外は見えず、日が昇り、また暖房がきいてきて初めて外が見える有様だった。

神社も小さな本殿とスキ堀、鳥居、社務所社宅と整備はまだまだで、平原の中にポツンと建っていた感じであった。学校も自宅の窓から見えるぐらい近くにある春日小学校であった。昭和四年に卒業するころは、人口は増加し、渡満した大正十三年当時の一万九千人

が二万三千人となり、神社境内地もおいおいと譲渡を受け、約一万坪余りとなった。同年、奉天中学に進学した。入学試験も厳しく、競争率も三倍か四倍と聞いていた。やっと合格したが、当時は大都市に中高校、大学などが集中、地方都市からの応募者があって、激しさが倍増したのである。

中学在学三年生の昭和六年九月十八日に満州事変が起こった。当時、真夜中に轟音とともに窓ガラスが家中に飛び散る音で飛び起きた。神社の裏横に鉄道守備隊と練兵場があり、ここから重砲による柳条湖に向けての発射であったと後日聞いた。間もなく車両、馬匹の微発による騒音がしばらく続き、終わると全く人気がない、シーンとする静けさだった。夜明けとともに登校すると、全校生の前で名和校長から訓示とともに、四、五年生は小銃、弾薬を持ち、日本人街と中国人街の境界線の守備に、三年生以下は自宅周辺の警備に働くことになった。もちろん教育専門学校、医科大学生、在郷軍人は境界線に。

昭和九年卒業と同時に東京の国学院大学文学部神道

学科に入学、渋谷区氷川町に下宿し、文字通りの遊学で青春を謳歌した。父は昭和四年、中学入学時に病死したため、学費から下宿代、往復の列車賃などに至るまで、すべて祖父が負担してくれた。祖父の健在のために恩恵を受けたわけである。昭和十一年、二・二六事件があり、渋谷周辺は物物しさが漂っていた覚えがある。

昭和十二年卒業し、四月より滋賀県多賀町の当時の官幣大社多賀神社の出任雇員として就職、七月より八月にかけて二カ月間の第二回内務省主催の全国青年神職講習会に選ばれ、滋賀県代表として参加し、全国より選ばれた四十八人は、東京明治神宮に一カ月、次いで伊勢神宮に一カ月の受講をした。多賀大社に復帰するや、九月一日付けをもって主典（神職の身分は待遇官吏で出任は雇員、主典は判任官、祿宜は判任官の者と奏任官、宮司は奏任官で宮司は叙位あり、大畧従六位に叙せらる）となり、昭和十三年九月、奉天神社に赴任することとなった。この間、昭和十二年七月七日に支那事変が起こっている。徴集延期の後の徴兵検査

では、第二補充兵役編入で、くじ番は三番だ。

支那事変はやがて戦火が広がり、補充兵の召集が始まり、出征兵士のタスキがけの姿や見送る国防婦人会、愛国婦人会の壮行会が、駅頭や神社での武運長久の祈願が増えていった。満州は関東軍が守備し、昔は鉄道守備隊であったが、増強されて全満州を支配するまでになっていた。そのころは軍の要人、官庁の要人の往来も激しく、神社への正式参拝者で記帳する芳名簿も、肩書が如実に物語って、時局が大きく変わろうとしていることが窺えた。

こうした中で昭和十五年には、皇紀二千六百年の記念として日本全国、満州全国で式典や、旗行列、提灯行列などが行われ、戦意高揚を計り、神社への参拝も多く、五月と九月の十四日、十五日二日間行われる祭礼も、みこしの市内巡行はにぎやかさを超して、一種の物すごさを感じさせるほどだった。境内では剣道大会、銃剣道大会、相撲大会、弓道大会などの格闘競技が行われ、時局の反映を思わせた。学校も毎月一日には全校生徒の参拝があり、特に浪速高女はかかし

たことはなかった。

昭和十六年十二月八日に米国に対する、宣戦布告により第二次世界大戦に突入した。ますます補充兵の召集も頻繁となり、私も昭和十八年に一カ月、十九年に三カ月の召集に応じ、それぞれ軍事教育を受けることとなり、どの職場にも、どの神社にも兵役のいかんを問わず、若者は戦線に動員され、また国民総動員令が発せられ、あるいは北方に、あるいは南方へと送られるように激化した。

私には二十年七月に三度目の召集があり、拉法ウツホの現地に赴いた。拉法では兵舎はなく飛行機格納庫の一隅に（飛行機は一機もなく、空っぽ）、私服のまま一週間ほどおり、やつと軍服、ゲートル、靴が届き、更に二、三日して帯革とゴボー剣が着き、格好だけは兵隊らしくなった。銃器や馬匹車両はない。隊の編制が行われ、山砲の混成旅団として、旅団長の訓示とともにそれぞれの幕舎へ移った。やがて銃器は小銃が一小隊に三丁から五丁、馬匹車両が一中队に二〜三両、山砲が一大隊に一門という状態だった。それから平日の訓

練が続き、七月末から八月初めまで過ごした。

八月に入った二〜三日ごろと記憶しているが、非常召集が真夜中にあり、はね起きて幕舎をたたみ、ソ連国境へ進軍との命令が出た。わずかの私物を奉公袋に入れ、大半が丸腰のまま出発し、一時間ぐらいい行軍し露営した。ウトウトと眠りに入った二時か三時ごろであつたらうか、また非常召集だ。今度は幕舎も私物も皆燃やし原隊へ退却せよとの命令だ。黙々と退却中、白々と夜が明けるところに、ソ連飛行機の飛来あり、低空よりピラを散布して遠のいて行く。二〜三度飛来あり。日本の無条件降伏と無駄な抵抗はやめろのピラだった。

原隊に着くと、既に鉄条網が張られ、武装解除だ。肩章や襟章ははぎとられ、丘陵地帯に張られた幕舎へ入り、捕虜生活の一步を踏み出した。したがって、退却中で八月十五日の詔勅放送のあったことなど知る由もなかったのである。一旅団を収容する幕舎は、丘陵一面を覆うほどだった。もちろん寝具などあるはずもなく、着たままのゴロ寝だ。

翌々日から捕虜の日課の使役が始まった。私たちの隊は森林地帯に敷かれたレールの取り外し作業で、次々と奥地奥地へと進んだ。樹々の伐採班、枕木外しの班、レール外しの運搬班とそれぞれを分担した。はや九月に入り降雨もしきりとなり、雨露を凌ぐ物が何一つなく、やむなく灌木の枝を屋根の形に組み、草をふき一時凌ぎのような姿のままにうづくまって寝るのである。夜の冷え込みで神経痛を起こす者、とうもろこしの粉末の缶詰茶わん一杯と岩塩と高粱の実一杯だけの食糧で腹痛、下痢を起こす者、各作業中けがする者など続出する有様だった。この森林鉄道の取り外した資材は全部ソ連へ運ばれたのである。

私はレールの運搬に従事し、誤って落とし足をけがしたので、作業より除外され、野戦病院へ送られ後方に退いた。今でもこのけがの傷跡が残っている。当時ソ連兵は内臓疾患や神経痛などは病気とは認めず、野戦病院送りは、作業のできない外傷者ばかりであった。さすが病院はそれなりの施設が整っていたが、周囲は鉄条網の中だ。

病院にはソ連軍医と衛生兵、また日本の軍医も若干いた。恐らく通訳をかねた軍医であろう。外傷の足もおいおいと回復し、毎日繃帯交換にくる衛生兵とも顔なじみになり、退院を迫られたが、繃帯を外すことを拒み、また原隊に戻ることを延ばす口実をつけて、この間に病院より脱走することを同室の者と相談することとした。食事は病院のためか比較的良好、三食には黒パンと米飯（握り飯）が少量とはいえ付いてきた。

これで脱走する計画を練り、実行の日時、服装、携帯する物など具体的相談の結果、一番困ったことは服装で、軍隊色の物は一切着ない、持たない、付けないということとし、軍服を中国服（上下）に軍靴を中国靴に、米は軍足に入れず一切持っていない。脱走する人数は地理に比較的明るい小人数とし、私は奉天よりの召集につき、新京よりの者、大連よりの者の三人とした。ほかの人も同様な組み方をした。ただし、実行日は連日に行くことはせず、寒気がくる前とし、時刻は夕食がでる、まだやや明るい時にし、ソ連衛兵も食事中で、門衛より離れた隙とする。中国服は、毎朝

洗顔する鉄条網近くの井戸に群がってくる中国人と、万年筆、時計を物々交換し、ひそかに床のアンペラの下にかくし持っておく。更に脱走する方向は、病院に比較的近い高粱畑に逃げこむことに決めた。十月のため、畑には馬鈴薯や高粱、とうもろこしの時季で、食糧はなんとか食いつなげると見込んだのである。ソ連衛兵には食事時に好んで飲む「ウオッカ」を日本軍医に若干の金を出し合つて頼み込み、食事時間を延ばしてもらふことにした。

実行の日は十月半ばだったと思う。

脱走は成功した。しばらく高粱畑に潜んで、夜が更けるのを待った。これからの行動は、夜間だけだから方角を間違えないよう、北斗七星より判断し、しかも、敦化^{とんか}をめざして畑の高粱を揺らさないよう、気付かれぬように進まねばならず、なかなか手間どった。ここで気付いたことは、月夜は危険であることだ。高粱を揺らさないとは言つても、どうしても三人が動くとき、月明かりをすかして見えることだった。したがって、月夜は行動ができないために、なかなか進め

なかった。加えて食糧もとうもろこしだけで、馬鈴薯はとても生では食えないし、飲料水の確保が難しく雨が降ればよいが、たまつた汚水を飲むより仕方がない。下痢に悩まされ、体の衰弱も進み、いよいよはかどらない。

随分、長い日数がたつたように思えたが、三日か四日ぐらいであろう。高粱畑ですくんでいた先方に、焚き火かカンテラかローソクかは知らぬが光が見えた。半ば救われたような気がした。しかし何の光か、ソ連兵か中国人の建物からのものかを確認するため、腹ばいで近寄り話す言葉が分かる距離まで進み、どうやら日本語のようだったと分かつたときは嬉しさでいっぱいだった。駆け出して行きたいが、うっかり護衛のソ連兵に捕まるかもしれない、更に様子をうかがうことにした。どうやら開拓民の人たちのようで、暖をとるための焚き火やら、自炊の火であると判明。学校のような様子で、避難した人たちが統率され役員で指揮されている様子で、夜半にその一人に頼み込み、まぎれ込むことができた。

全くの幸運だった。しかし、今までのように生のもうもろこしなど食べられないので、近くの中国人の農家へ行き、大きい丸太を鋸で切ると、日当三十円で食事つきという約束で現金を得られることとなった。しかし、悲しいことに今までの栄養失調で、力が出ず二人で一本を切断することができず、せいぜい二、三片しか裁断できず、日当は二分の一。ただし、食事は出すということになった。このとき、米飯の暖かいのを食べた。おいしいことこの上なし、銀めしだ。副食がなくても……。

こういった日々を三日か四日続け、わずかの金を得て命をつないだわけである。やがてソ連兵がやってきて、避難民を無蓋貨車にのせ、敦化^{とんか}方面へ向かうという情報であった。真偽は別として、とにかくこの貨車に乗るべく、避難民の小さい子を抱き、私たち三人もその一員になりすまして乗りこんだ。

当初、満州に乗り込んできたソ連兵は、丸坊主でイレズミをした囚人兵ということであった。程度は悪く低いので人員の数がいい加減で、まぎれ込んで列の中

に入っても知らん顔だ。女、子供を貨車の真ん中に入れ、男が車の端に座って囲むようにして乗り込んだ。これは列車が止まると中国人が群がりきて、略奪や婦女子に暴行を加えるのを少しでも防ぐためであった。何の役にも立たなかつたが……。これら開拓難民の特に体の弱った婦人が、やせ衰えた幼い乳児をかかえている有様は、気の毒で見るに忍びないが、私たちには何もしてやれない。乳児の泣く声も力なく、死の近いことを思わせる。こういう人たちが多く、中には抱かれたまま死んだ乳児もあつた。貨車ごとにソ連兵が一人乗り監視につき、群がり来る中国人を追い払つてもくれず、酒を飲んでゐる。列車は火力が薪のため速度が遅く、時々立往生する。薪の補給に時間をとられ、目的地へ着くのが遅れるばかりである。遅れると遅れるほど、我々の健康と食糧が心配だ。とにかくこんな悪条件下で、平常なら四、五時間で行けるところを一日から二日もかかる始末だった。

やはり敦化^{とんか}であつた。ここでも小学校が難民の収容所だったが、かなり治安もよく、外出もできて賃仕事

で日銭を稼ぐことができた。これらの難民列車は引揚げが始まっていたのである。開拓民を優先してのこと、私たちも一応開拓難民になっていた。敦化に約一週間滞在し、新京への引揚げ列車が出ることとなった。

十月も半ば過ぎ、寒さも加わってきた。こうしたことを繰り返して新京へ向かった。新京は当時満州国の首都であるだけに、治安もよく、ソ連、中国の軍部と在留居留民会が組織され、関東軍の備蓄物資の放出された闇商品で物資も豊富であった。

私たち三人のうち一人が新京よりの応召者で、自宅があるため世話になることとなった。案内で同氏の釘付けの玄関を入り、夫人に世話をかけることに感謝の念いっぱいだった。よごれたしらみのついた衣類を、煮沸消毒したり心尽くしのもてなしに恐縮しながら、四日ほど滞在し、引揚げ列車が出るのを駅に一人が偵察に行き、通報を受け難民と共に出る日時を待った。こうして私と大連の召集者二人は、難民列車に乗ることができた。

奉天に南下する途中の状況は、略奪や暴行と前記と

同様な形で、五、六時間のところ二日ばかりで着いた。今度は私が大連の者を同様の世話すべく、自宅に案内した。しかし家にはソ連兵の将校らしき者がおり、入ることができず家内を探しに手間取り、やっと富士青年学校に避難しているのを発見。ここでは大連の者を世話できず、叔父が避難していた宮島町の、建築会社を改造した倉庫へ落ち着くことにした。非常時の折であり我慢してもらい、できるだけの世話をして、引揚げ列車の出る機会を探っていた。当時はソ連兵により、中国人を使って、いわゆる日本人狩りといって、逃げ返った日本人を逮捕し、再び連行することが、しばしばあったので、列車に乗り込む難民に混ざっている者も、逮捕するリストにのぼっていた。

私も大連の者もまだまだ栄養失調から回復していないので、食事と健康に留意し一週間ぐらい世話し、米を袋に入れて持たせ、中国服のまま送り出したのである。既に十一月の半ばを過ぎていた。

栄養失調でむくんだ、だるい体を癒すために奉天神社社宅に隠していた、縁の下の行李より、ひそかに持

ち出した衣類を現金に替えるため、したこともない街頭での立ち売りをし、米を買った。これは家内の仕事で、男装をし丸坊主の姿である。

かくて正月を迎え、私の体調の回復を待つべく毎日毎日街頭に立っていた。一月半過ぎ回復した。限りある古着は売れない。そこで、敗戦まで雇っていた中国人が経営する米や雑穀類の店に、一時米や大豆を借りてリヤカーに積みこみ、早朝六時ごろから始まる平安広場でのわか作りの卸市場に走りつけ、少しばかりのマージンを得るため通ったものだ。しかし水などは、原価も安いが売価も安いので、家族を食べさせるまでの儲けはなかった。

そこで次は、やはり神社に雇っていた小使いがパン類を商売していたので、寒い時節にパンが冷めないよう、綿入れの毛布にくるんで、箱に納め、平安広場の市場の良い場所どりに息せき切って走り、約二時間で全部売り切った。儲けは大きくなり貯蓄ができるようにならなくなった。もちろん米やパンなどの原価は仕入れ先の元雇人の中国人に払った。それまで現品は貸し

てもらったことだ。平安市場には、元満鉄の役員だった人、大きな商店の経営者、会社員などあらゆる階層の日本人ばかりで、相手は中国人だ。立場が全く逆転した形だ。卸市場のため広場は十時ごろには終わる。

こうした中にも、ソ連、八路军による日本人狩りがあり、連行されて行く人もあるため、元軍人あるいは脱走兵、体軀の頑健そうな人たちは、目配り気配りを怠ることはできない。治安が良くなったとはいえ、女子供は外出もままならない。荻町、葵町など満鉄高級社宅の多い家々は板の釘づけで、店舗は全く主客転倒で使用人が主人に、主人は使用人ということまで、きれいだった春日町の商店街は、たちまち、焼肉屋や油を使った店に変わり、油煙でくすぶり真っ黒くなり、昔の面影はなくなっていた。

奉天神社はソ連兵に占拠され入れなくなり、それぞれの職員の社宅は半ばこわされ（木製のものは皆燃料に）、住める状態ではなく、二軒ぐらいをソ連兵の将校が使っていた。この兵たちが外出する隙をみて、縁の下に掘った防空壕に隠した物資を少しずつ、避難先

の家に持ち帰った。わずかな数ではあるが、乳幼児をかかえた私たちは、オシメやミルクを探すのに必死で隙をうかがったものだ。神社の近くの春日小学校、加茂小学校などには、生死をかけて避難してきた、主に開拓団の人々でいっぱい、校庭は亡くなった乳幼児や老人たちの墓の土マンジュウで足の踏み場のないほどであった。戦争に敗れたみじめさ、やりきれなさ、皆弱者に集中した姿をかいま見る思いだった。一方では関東軍高級官僚たちがいち早く、物と地位を利用して、既に帰国した者もあるという話も聞こえてくる。流言飛語に日夜、右往左往する庶民が一番ひどい目に遭ったのである。

こうした中においおいと引揚げの話があり、奥地よりの避難者を最優先に三月か四月ごろにかけて始まり、現地在住の我々は次とされた。

日本により蓄積された諸物資は闇商品に横流しされ、中国人の手に入り寒い中の暖房用の石炭は皆無、列車の燃料も薪。機関士、運転士も技能未熟な中国人に運転され、時には途中で止まったり、燃料切れなどで引

揚げ列車は遅々として進まず、無蓋貨車での引揚げは病人や乳幼児の生命を短くしたのである。

おいおいと現地在住の我々の引揚げが始まり、六月ごろより順次在住町内別に、正規の奉天駅でなく市外地の貨物駅に集合することになり、私たち家族は橋立町。祖父は八幡町、叔父夫婦は宮島町、叔母一家は青葉町、私の母、妹二人は以前に大連に移住して在奉せず、皆が別々のために、引揚げの日時が違っていた。私たちは六月中旬ごろに貨物駅へ徒歩で集まり、無蓋貨車で錦州へと出発したのである。

当時所持品は一人三十キロ（年齢を問わず）と限定され、私たちは乳児のオシメ、着替えてリュックサックはほとんど満杯で、前と背中に背負い、当時三歳の長女の手を引き、乳児の長男は家内の前に、後ろはリュックサックと持てるだけ背負って乗り込んだ。まだ三歳の長女は約三キロから四キロは十分ある距離を駅まで歩き通したのである。引揚げてきて数年たつてから長女に聞くと、覚えがないと言う。錦州に着くまで前述のとおりノロノロ運転で中途停車すると、現地中

国人が略奪や婦女子を連行するなどでおさら時間を要し、連行された婦女子を連れ戻すため、乗員の我々からいくばくかの金品を集め、貨車ごとの責任者が交渉に行く始末で、従来なら数時間で行ける錦州まで二日ぐらいかかった。食料や飲料水のためか、生後六カ月の長男が下痢をして高熱を出し、薬も『百草』ぐらいしかなかく、水で冷やす程度で引揚船に乗るまでに死ぬかと思つたほどだ。六月は雨多く屋根・壁が破れた半壊家屋で雨露をしのぎ、三日ぐらい錦州に在留した。この間、当時の六〇七万円持参した金は、日本円で一人千円しか持ち帰ることができず、残金は寄付して、四千円のみ所持することになった。長男の生命力が強かったのか高熱で衰弱したとはいえ、そのままLST船の船底へ乗り込むことができた。行き先は舞鶴だ。船底に押し込められた引揚者の充滿する中に、また長男が発熱し、水葬やむなしと覚悟をきめたのであるが、幸い隣に乗り合わせた人の好意により投薬を受け、一命を取り止めた。長男の恩人といまだに尊敬し有り難く思っている。

昭和二十一年六月三十日にやっと舞鶴岸壁埠頭に着き、船上より見える日本の土を踏むことの嬉しさに胸のつまる思いだった。よくぞ、ここまで生きて帰れたと……。出迎えの近親者、その他縁故者の大勢の中で所定の手續を終え、頭、背中にD.Tの粉末をかけられ、予防注射を受け、遠近距離別にそれぞれ列車に乗る人、一時収容所に入る人々に別れて散って行つた。私たちは比較的近いため京都經由岐阜へと向かつた。故里はちよūd、枇杷のなる季節で駅頭で売るのを食し、「懐かしの日本へ帰つたな」、日本は「ここだ」と踏みしめる足にも力が入つた記憶がある。

岐阜駅頭に降り立ち、夕闇の中を駅前広場へ。広場では引揚者の受け付けをしたり、先着の人々の迎える中で、私たちはひとまず収容所へ泊まつた。当時駅前には引揚者が一時的に開いていた掘つ建て小屋で衣類の店が、ぎつしりと建つていた。ほとんどの人が引揚者であつた。今でも駅前に衣類の卸問屋が多いのはそのためであるう。

翌朝、私たちは取りあえず、加茂郡古井町（今の美

濃加茂市森山)の姉の家へ落ち着くことになった。この間、私は岐阜の伊奈波神社、垂井の南宮大社、飛騨一宮水垂神社などを巡り、就職依頼に回った。いずれの神社も出征神職の復員を待っているとして、神職への道は閉ざされてしまった。

やむなく姉の家を辞し、家内の実家の九州大分に入り、義父のもとへ行ったが、義父も朝鮮京城からの引揚者のため、同居できず、二、三日してまた岐阜へ引き返し、家内の祖父が美濃町と知り、取りあえず、祖父の知人の美濃町の武井家に寄宿することとなった。ちようど夏休みに入らんとする時季にて、お寺の経営する保育園が休みで、空室ありとて夏休みの間、板の間一室を借り、武井家より出ることもなかった。引き揚げてより二〜三カ月たつてしまったのである。

この保育園寄寓中に長男が伝染病(チフス)にかかり、伝染病棟へ入ったので、家内が付き添い、私は自炊し、長女と自分のを含め食事を病棟(約四キロ離れている)に毎日届けに行くやるせない日々が続いた。四千円持ち帰った金もそろそろ使い果たし、わずかず持

ち帰った私の一張羅の服や家内の着物を売り、米に換え食いつないだ。これではと思いお寺の住職が民生委員のためお願いして、日給でもよいから日銭の入る職を探してもらおうこととした。これを知った当時の町会議員で福祉民生担当者が、役場に入るよう努力してくれて採用と決まった。戸籍係を初めとし、月給も当時二百円と定められ、そのうち、世の中も治まれば、神社界に復帰できるものと思ひ、その時機到来を待つこととした。しかし、なかなかその機来たらず、そのまま役場職員として勤続することになった。履歴上、高等教育を受けているとて、即、係長、以後各課長を務めること二十五年間に及ぶことになった。

当時新制高校卒の職員もわずかで、ほとんど中学卒職員のため給料も最高であった。ただし三役は別としてである。この間、高校の教師不足で探していたらしく、私へ国語の教師の勧誘もあったが断つた経緯もある(当時、高校教師の給料が役場より低かったため)。最終歴を総務課長として、五十七歳の定年退職となった。昭和四十八年だった。今は定年は六十歳だが比較

的元気で健康のため、本巢郡の糸貫町にあった岐阜短期大学事務長として勤務することになり、毎朝六時ごろのバス、電車を乗りついで往復だ。この地方には学校が多く、電車はほとんど学生に占領され座ることはできず、六時終了で家には八時、時には九時にも帰ることができなくて、三カ月ぐらいで辞め、市の囑託になり、各課を回り四十九年ごろより公職として市固定資産評価員、岐阜行政監察局へ市よりの推せんにて行政相談委員に委嘱補佐することとなった。ほかに公民館運営審議委員、市民相談員など、社会福祉的な役職について、結構忙しい毎日をおすごした。

一応子供の成長とともに生活も安定し、趣味として何か一人でできるものを考えていた矢先に、知人に誘われ謡曲と水墨画を習得すべく、謡曲を元市教育長に、水墨を岐阜の水野師匠につき、週二〜三回岐阜へ通うこととしたのである。傍ら当時の八幡神社の宮司が、高齢で退職後の後任として、氏子総代より勧めもあり、昭和五十七年に就任した。以後、現在に至っているが、趣味の水墨画は引き続き練習を重ね、約三十年に及ん

で現在は、三、四十人を指導するまでになって、私の一つの生きがいのようになっている。

四人の子女も、それぞれ家庭をもち独立し、家内と結婚して五十年たち、金婚式を子らが祝ってくれて、早や四、五年たつのである。

戦前・戦後を通じて、神社界の永年勤続、行政相談員の永年勤続でそれぞれの長より表彰と共に、今年、勲六等瑞宝章に叙せられ、宮中に参内し、天皇に拝謁を賜ったことが、八十年の人生のしめくくりのように感じ、感謝感謝の毎日である。

【執筆者の横顔】

奉天神社は、明治四十三年、日本人の崇敬の基となるべく創建され、大正五年に山内誓夫氏の祖父山内祀夫氏を神職として伊勢神宮から派遣され、ひいて満州各地に分霊神社を創建した。つまり在満日本人の心よりどころとなった由緒ある神社である。

この神社に、山内氏が国学院大学を卒業して、昭和十三年九月、奉天神社の神職として赴任したのである。

そのころ、前年の十二年に支那事変が起こり、次第に戦火は広がり、武運長久の祈願行事が頻繁になった。やがて十六年十二月八日に米国に対する、宣戦布告による第二次世界大戦に突入した。

昭和二十年七月に、山内氏に召集令状があり、直ちに拉法の山砲混成旅団に入った。がしかし銃器、小銃、馬四車両が不足だらけであった。

八月に入って二、三日ころ、非常呼集がある。

ソ連国境へ進軍との命令であり、大半の兵は丸腰のまま出発し、間もなく露営。また非常呼集である。今度は幕舎も私物もみな燃やして原隊へ退却せよとの命令である。明け方には、ソ連の飛行機から低空よりの日本の無条件降伏ビラ散布があった。「無駄な抵抗は止めろ」。

原隊につくと、武装解除、肩章や襟章ははぎとられ、丘陵地帯の幕舎に入り、捕虜の第一歩を踏み出す。森林地帯につながれたレール取り外し作業が次々と奥地へと進んだ。九月に入り降雨しきり、夜の冷え込みで神経痛を起こす者、食糧はなく腹痛、下痢を起こすも

のなど続出する。誤ってレールを足に落としてけがをしたため、作業から除外されて野戦病院へ送られ、後方に退いた。けがの回復に伴い、脱走を企図し、三人で実行する。成功したのは十月半ばであった。

どこをどう逃避したか、敦化の街に入り、開拓者の避難民にもぐり込んで難民の面倒をみる。

避難民にまぎれて行動し、新京を経て、奉天に着き、家族を探し、ついに奥さんと長女に会うことができた。

奉天から錦州、コロ島より乗船、昭和二十一年六月三十日、やっと日本に帰国した。

昭和二十二年、美濃町役場に就職し、四十八年退職、その後要請されて美濃市八幡神社の宮司として現在勤めている。

(引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助